

# 手話も左脳で理解

## 日本語と同じ、実験で明らかに

酒井邦嘉・東京大助教(言語脳科学)らが、手話を理解するとき、日本語音声を聞くときと同じ脳の部位が活発になることを突き止めた。手話は意思疎通の単なる手段のひとつではなく、日本語や英語と同様の高度な言語かどうか、長年議論になっていた問題に、一つの答えを出したことになる。(鈴木京一)

酒井助教は、機能的磁気共鳴映像法(fMRI)という方法で脳を観察することで、言語と脳の関係を研究してきた。

調査の参加者は、手話が最初に覚えた「母語」である者9人、自分は聞けるが、親がろう者で、手話と日本語両方が同じように使える人12人、耳が聞こえて、日本語だけを使う12人の計33人。

参加者に対し、「今度のろう者大会はいつですか

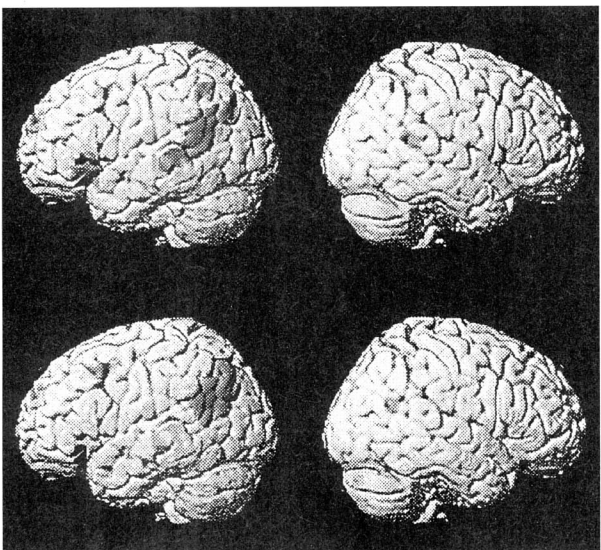
？」「来年7月石川で開かれます」などの手話と日本語の文をビデオと録音で示し、「去年の7月石川で開かれました」のように、文脈に合わない文が示されたときにボタンを押してもらった。このとき、脳の活動を観察した。そして、単語を不規則に並べた中に単語でないものを交えた場合と、音や画像

は言語と同じだが、無内容な、文を逆再生した録音やビデオを示した場合と比較。文や言語の理解に限って働く脳の部位を調べた。結果は、聴者が日本語の文を、ろう者が手話の文を理解したときの両方も、左脳と同じ場所が活性化することがわかった。

これまで、左脳を損傷すると手話の失語が起きることがわかっていたが、手話を見るとときに右脳が活性化するという報告もあり、論争になっていた。

日本のろう教育は、手話を使わず、読唇法と発声訓練で音声日本語を身につけさせる「口話法」が中心だ。手話を言語ではなく、「手まね」とみなしてきた歴史が背景にあるといわれる。これに対し、全日本ろうあ連盟がろう学校での手話教育を求め、03年にはろう児の親たちが日本弁護士連合会に対し人権救済の申し立てをした。

酒井さんは「手話にも音声言語と同じ神経基盤があることが示された。ろう教育では、手話を身につけさせたのちに、第2言語として日本語を学ぶべきだと思う」と話している。



左二つは脳の左側、右二つは右側を写した  
もの。色の濃い部分が文章理解のときに活動する部位を示す。上が手話、下が音声日本語を理解した時、酒井邦嘉助教提供